

(一)
宮重 大根のふとしく立てし宮柱は、ふろふきの熱田の神のみそなはす、
七里のわたし浪ゆたかにして、來往の渡船難なく桑名につきたる悦びの
あまり……

と口誦むやうに獨言の、膝栗毛五編の上の讀初め。霜月十日あまりの
初夜。中空は冴切つて、星が水垢離取りざうな月明に、踏切の棧橋を渡
る影高く、灯ちらりと目の下に、遠近の樹立の骨ばかりなのを視めな
がら、桑名の停車場へ下りた旅客がある。
月の影には相應しい、眞黒な外套の、瘦せた身體に些と廣過ぎるを緩

歌行燈

く着て、焦茶色の中折帽、眞新しいは抜て可が、馴れない天窓に山を立てゝ、鍔をしつくりと耳へ被さるばかり深く嵌めた、剩へ、風に取られまいための留紐を、ふらりと皺びた頬へ下げた工合が、時世なれば、道中、笠も載せられず、と断念めた風に見える。年配六十二三の、氣ばかり若い彌次郎兵衛。

然まで重荷ではないさうで、唐草模様の天鵝絨の革鞆に信玄袋を引揃めて、這個を片手。片手に蝙蝠傘を支きながら、

「さて……悦びのあまり名物の焼蛤に酒汲みかはして、……と本文にある處さ。旅籠屋へ着の前に、停車場前の茶店か何かで、一本傾けて参らうかな。(何うだ、喜多八)と行きたいが、其許は年上で、些とそ

り、か合はぬ。だがね、家元の彌次郎兵衛どの事も、伊勢路では、これ、同伴の喜多八にはぐれて、一人旅のとばくと、棚からぶら下つた宿屋を尋ねあぐんで泣きさうに成つたとあるです。處で其許は、道中松並木で出来た道づれの格だ。其の道づれと、何と一口遣らうではないか、えゝ、捨平さん。

「また、言ふわ。」

と苦い顔を離くした、同伴の老人は、まだ、其の上を四つ五つで、やがて七十なるべし。臘虎皮の鍔なし古帽子を、白い眉尖深々と被つて、鼠の羅紗の道行着た、股引を太く白足袋の雪駄穿。色褪せた爵金の風呂敷、眞中を紐で結えた包みを、西行背負に胸で結んで、これも信玄袋を

手に一つ。片手に杖は支いたけれども、足腰はしやんとした、人柄の可いお爺様。

「其の捻平は止しにさつしやい、人聞きが悪うて成らん。道づれば可けれども、道中松並木で出来たと言ふで、何とやら、其の、私が胡摩の灰でいもあるやうに聞えるぢや。」と杖を一ツ丁と支くと、後の雁が前に成つて、改札口を早々と出る。

故と一足後へ開いて、隠居が異見に急ぐやうな、連の後姿をじろりと見ながら、

「それ、其處が其れ捻平さね。松並木で出来たと云つて、何もござのはいには限るまい。最も若い内は遣つたかも知れんてな。はゝは、」

人も無げに笑ふ手から、引手繰るやうに切符を取られて、はッと驛夫の顔を見て、きよとんと生真面目。

成程、此の小父御が改札口を出た殿で、何をふら／＼道草したか、漬車は最う遠くの方で、名物焼蛤の白い煙を、夢のやうに月下に吐いて、眞蒼な野路を光つて通る……

「やがて爰を立出で辿り行くほどに、旅人の唄ふを聞けば、」
と小父御、出た處で、けろりとして又口誦んで、

「捻平さん、可い文句だ、これさ。……

時雨蛤みやげにさんせ、

宮のおかめが、……ヤレコリヤ、よチ志よ志。」

「旦那、お供は何うで、」

と停車場前の夜の隈に、四五臺臘朦と寂しく並んだ車の中から、車夫が一人、腕組みをしてのつそり出る。

これを聞くと彌次郎兵衛、口を捻ぢて片頬笑み、

「有難え、圖星と云ふ處で出て來たせ。が、同じ事を、これ、(旦那衆戻り馬乗らんせんか)と何故言はぬ。」

「へい」と言つたが、車夫は變哲もない顔色で、其のまゝ棒立。

(二)

小父御は外套の袖をふら／＼と、醉つたやうな風附で、

「遣れよ、さあ、(戻馬乗らんせんか)と後生だから一ツ氣取つてくれ。」「へい、(戻馬乗らんせんか)と言ふでござりますかね、戻馬乗らんせんか。」

と早口で車夫は實體。

「はゝはゝ、法性寺入道前の關白太政大臣と言つたら腹を立ちやつた、法性寺入道前の關白太政大臣様と来て居る。」と又アハ、と笑ふ。

「さあ、もし召して下さい。」

と話は極つた筈にして、委細構はず、車夫は取着いて棍棒を差向ける。小父御、目を据えて放と見て、

「ヤレコリヤ車なんぞ、よナ志よ志。」

「否、よしではない。」

と其處に一人つくねんと、添竹に其の、枯菊の縋つた、霜の翁は、旅のあはれを、月空に知つた姿で、

「早く車を雇はつしやれ。手荷物はあり、勝手知れぬ町の中を、何を當にふらつかうで。」と口叱言で半ば咤く。

「いや、先づ一つ、（よチ志よ志）と切出さんと、本文に合はぬてさ。處へ喜太八が口を出して、（せうろく四錢で乗るべいか。）馬士が、そんなら、ようせよせ」と言ひやす。馬がヒイン／＼と嘶ぶ。

「若いもの、其の人に構ふまい。車を早く。川口の湊屋と言ふ旅籠屋へ行くぢや。」

「えゝ、二臺でござりますね。」

「何でも構はぬ、私は急ぐに……、」と後向きに摑まつて、乗つた雪駄を爪立てながら、蹴込みへ入れた革鞆を跨ぎ、首に掛けた風呂敷包みを外づしもしないで搖つて置く。

「一蓮托生、死なば諸共、捨平侍ちやれ。」と、くす／＼笑つて、小父御も車にしやんと乗る……

「湊屋だえ。」

「おいよ。」

で、二臺、月に提灯の灯黄色に、廣場の端へ駆込むと……石高路をがた／＼しながら、板塀の小路、土塙の辻、徑路を縋ふと見えて、寂し

歌行燈

三

い處幾曲り。やがて二階屋が建續き、町巾が糸のやう、月の光を廻で覆ふて、兩側の暗い軒に、掛け燈が疎に白く、枯柳に星が亂れて、壁の蒼いのが處々。長い通りの突當りには、火の見の階子が、遠山の霧を破つて、半鐘の形活けるが如し、……火の用心さつさりやせう、金棒の音に夜更けの景色。霜枯時の事ながら、月は格子にあるものを、桑名の妓達は宵寝と見える、寂しい新地へ差掛つた。

輻の下に流るゝ道は、細き水銀の川の如く、柱の黒い家の状、恰も獺が祭禮をして、白張の地口行燈を掛連ねた、鐵橋を渡るやうである。爺様の乗つた前の車が、はたと留つた。

われ聞け……寂寞とした一條廊の、煉瓦にも響き轉げる、轍の音も

留まるばかり、灘の浪を川に寄せて、千里の果も同じ水に、筑前の沖の月影を、白銀の糸で手縫つたやうに、星に晃めく唄の聲。

博多帶しめ、筑前絞り

歩行く姿
柳町

と博多節を流して居る。……つひ目の前の軒蔭に。……白地の手拭ひ頬被りすらりと瘦ぎすな男の姿の、軒の其の、うどんと紅で書いた看板の前に、横顔ながら俯向いて、たゞ影法師のやうに彳むのがあつた。捨半はフト車の上から、頸の風呂敷包のまゝ振向いて、何か背後へ聲を掛けた。……と同時に彌次郎兵衛の車も、丁度其の唄ふ聲を町の中

歌行燈

で引挾んで、がつきと留まつた。が、話の意味は通せずに、其のまゝ捨平のが又曳出す……後の中車も續いて駆け出す。トニ臺が一寸摺れぐに成つて、すぐ舊の通り前後に、流るゝやうな月夜の車。

(三)

お月様が一寸出て松の影、

アラドッコイショ、

と沖の浪の中へ、颯と、撥を投げたやうに、霜を切つて、唄ひ楽てた。……館飴屋の門に博多節を彈いたのは、轉進を稍々縱に三味線の手を緩めると、撥を逆手に、其の柄で彈くやうにして、仄のりと薄赤

い、其屋の板障子をすらりと開けた。

「御免なさいよ。」

頬被りの中の清しい目が、釜から吹出す湯氣の裡へ、すつきりと出たのを一目。驚いた顔をしたのは、帳場の端に土間を跨いで、腰掛けながら、うつかり聞惚れて居た亭主で。紺の筒袖にめくら縞の前垂かけ、草色の股引で、尻からげの形、によいと立つて、

「出ないせえ。」

はづるいな。……案するに我が家の門着けを聞徳に、いざ、其の段に成つた處で、件の(出ないせ)を極めてこまそ心積りを、唐突に頬被を突込まれて、大分狼狽へたものらしい、最も居合はした客はなかつた。

歌行燈

一六

入つて、
門附は、澄まして、背後じめに戸を閉てながら、三味線を斜につゝと

「あい、親方は出すとも可いのさ。私の方で入るのだから、……ねえ、
女房さん、そんなものぢやありませんかね。」

と些と笑聲が交つて聞えた。

女房は、これも現下の博多節に、うつかり氣を取られて、釜前の湯氣
に膝として立つて居た。……浅黄の襟白い腕を、部厚な笠の蓋に一
寸載せたが、圓背をがつくりさした、色の白い齒を染めた中年増。此の
途端に颶と臉を赤らしたが、竈の前を横々ちよに、がたくと下駄の音
で、亭主の膝を斜違ひに、帳場の錢箱へがつちりと手を入れる。

「あゝ、御心配には及びません。」

と門附は物優しく、

「串戯だ、強請んぢやありません。此方が客だよ、客なんですよ。」

と、細長い土間の一方は、薄汚れた縦に六疊ばかりの市松疊、其處へ
揚れば座れるのを、釜に近い、床机の上に、ト足を伸ばして、

「何うもね、寒くつて堪らないから、一杯御馳走に成らうと思つて。え
ゝ、親力、決して其の御迷惑を掛けるもんぢやありません。」

で、優柔しく頬被りを取つた顔を、唯見ると迷惑處かい、目鼻立ちの
きりとした、細面の、臉に窪は見えるけれども、目の清らかな、眉の
濃い、二十八九の人品な兄哥である。

「へ……、いや、何うもな、」

と亭主は前へ出て揉手をしながら、

「しかし、此の天氣續きで、先づ結構でござりやすよ。」と何もない、
煤けた天井を仰ぎ、帳場の上の神棚へ目を外らす。

「お師匠さん、」

女房前垂を一寸撫でゝ、

「お銚子でござりますかい。」と莞爾する。

門附は手拭の上へ撥を置いて、腰へ三味線を小取廻し、内端に片膝を
上げながら、床几の上へ素足の胡座。
ト裾を一つ搔込んで、

「早速一合、酒は良いのを。」

「えゝ、もう飛切のをおつけ申しますよ。」と女房は土間を横歩ぎ。左
側の疊に据えた火鉢の中を、邪慳に火箸で搔つ堀つて、赫と赤くな
處を、床几の門附へついと寄せ、

「さあ、まあ、お當りなさりまし。」

「難有え、」

と鐵拐に襷へ引挿んで、ほうと呼吸を一つ長く吐いた。

「世の中にや、こんな炭火があると思ふと、里心が着いて尚ほ寒い。堪
らねえ。女房さん、銚子を何うかね、ヤケと言ふ燒燭にしておくんなさい。
些と飲んで、うんと酔はうと云ふ、卑劣な癖が着いてるんだ、お察しも

のですせ、えゝ、親方。

「へゝゝ、お方、それ極熱ぢや。」

女房は染めた前歯を美しく、

「あい／＼。」

(四)

「時に何かね、今此家の前を車が二臺、旅の人を乗せて驅抜けたつれ、此の町を、……」

と干した猪口で門を指して、

「二三町行つた處で、左側の、屋根の大きさうな家へ着けたのが、蒼く

月明りに見えたがね、……彼處は何かい、旅籠屋ですか。」

「湊屋でござります、なあ」と女房が、釜の前から亭主を見向く。

「湊屋、湊屋、湊屋。此の土地ぢや、まあ彼家一軒でござりますよ。古い家ぢやが名代で、前には大な女郎屋ぢやつたのが、旅籠屋に成つたがな、部屋々々も昔風其のまゝな家ぢやに、奥座敷の欄干の外が、海と一所の、大い楫斐の川口ぢや。白帆も船も通りますわ、鮪は刎ねる、鮪は飛ぶ。頗る類のない趣のある家ぢや。處が、時々崖裏の石垣から獺が這込んで、板廊下や廁に點いた燈を消して悪戯をするげに言ひます。が、別に可恐い怪方はしはせぬで。こんな月の良い晩には、庭で鉢叩きをして見せる……時雨れた夜さりは、天保錢一つ使賃で、豆腐を買ひに行

くと言ふ。其も旅の衆の愛嬌ぢや言ふて、豪い評判の好い旅籠屋ですがな、……お前様、此の土地はまだ何も知んなさらんかい。

「あい、昨夜はじめて此方へ流込んで來たばかりさ。一向方角も何も分らない、月夜も闇の烏さね。」

と俯向いて一口。

「どれ延びない内底を一つ温めやう、遣つたり！ほつ、」

と言つて、目を擦つて面を背けた。

「利く、利く……恐しい利く唐辛子だ。恁う、親方の前だがね、つい過般も此の手を食つたよ。丁見が悪いのさ。何、上方筋の唐辛子だ、鬼灯の皮が精々だらう。利くものか、と高を括つて、お錢は要らない薬味

なり、どしこと井へふぢまけて、松坂で飛上つた、……又遣つたさ、色氣はねえね、涙と涎が一時だ。」と手の甲で引擦る。

女房が銚子のかはり目を、ト掌で燭を當つた、

「お師匠さん、貴方は東の方ですなあ。」

「然うさ、生は東だが、身上は北山さね。」と言ふ時德利の底を振つて、垂々と猪口へしたむ。

「で、お前様、渋屋へ泊んなさらうと言ふのかな。」

其だ、と門口で断られう、と亭主は其の段含ませたさうな氣の可い顔色。

「御串戯もんですせ。泊りは木賃と極つて居まさ。吳蔵と笠と草鞋が留

守居。壁の破れた處から、鼠が首を長くして、私が歸るのを待つて居る。四五日は此の桑名へ御厄介に成らうと思ふ。……上旅籠の港屋で泊めてくれさうな御人品なら、御當家へ、一夜の御無心中したいね、どんなもんです、女房さん。」

「こんなでよくば、泊めますわ。」

と身軽に銚子を運んで寄る。と亭主驚いた眉を動かし、「滅相な」と帳場を背負つて、立塞がる體に腰を掛けた。いや、此の時まで、紺の鯉口に手首を寄めて、案山子の如く立つたりける。「ははは、お言葉には及びません、温飽屋さんで泊めるものは、醤油の雨宿りか、鰈節の行者だらう。」

と呵々と一人で笑つた。

「お師匠さん、一つお酌さしておくんなさいまし。」と女房は市松の疊の端から、薄く腰を掛け込んで、土間を切つて、差向ひに銚子を取つた。

「飛んでもない事、お忙しいに。」

「否な、内ぢや藝妓屋さんへ出前ばかりが主ですから、御覽の通りゆつくりぢやえな。眞個にお師匠さん佳いお聲ですな、なあ、貴方。」と横顔で亭主を流眄。

「然よぢや。」

とばかりで、煙草をぱつ〜。

「なあ、今お聞かせやした、あの博多節を聞いたればな、……私やは

んに、身に染みて、ぶる／＼と震へました。」

(五)

「然う讀められちやお座が醒める、酔も醒めさうで遣瀬がない。たかト大道藝人さ。」

「と兄哥は照れた風で腕組みした。」

「私がお世辭を言ふものですかな。眞實ですえ。あの、其の、なあ、悚然とするやうな、恍惚するやうな、締めたやうな、投げたやうな、緩めたやうな、まあ、何と言ふて可からうやら。海の中に柳があつたら、お月様の影の中へ、身を投げて死にたいやうな、……何とも言ひやうの

ない心持に成つたのですえ。」

「と背筋を曲つて、肩を入れる。」

「お方、お方。」

「と急込んで、譯もない事に不機嫌な御亭が呼ばゝる。」

「何ぢやいし」と振向くと、……亭主何時の間にか、神棚の下に、斜

と構へて、帳面を引繰つて、苦く睨み、

「升屋が懸は未だ寄越さんかい。」

「と算盤を、ぱちり／＼。」

「今時何うしたえ、三十日でもありもせんに。……お師匠さん。」

「師匠ぢやないわ、升屋が懸ぢやい。」

「そないに急に氣に成るなら、良人、ちやと行て取て來い。」

と下唇の刎調子。亭主ぎやふんと參つた體で、

「二進が一進、二進が一進、二一天作の五、五一三六七八九。」と、温領の帳の伸縮みは、加減だけで済むものを、醤油に水を割算段。

と釜の湯氣の白抜けた處へ、星の凍てさうな按摩の笛、月天心の冬の町に、恰もこれ風を吹込む聲す。

門附の兄哥は、ふと瘦せた肩を抱いて、

「あゝ、霜に響く。」……と言つた聲が、物語を讀むやうに、朗に冴えて、且つ鋭く聞こえた。

「按摩が通る……女房さん。」

「えゝ、笛を吹いて下さい。」

「畜生！ 怪しからず身に染みる、堪らなく塞いものだ。」

と割膝に危座つて、飲みさしの茶の冷えたのを、茶碗を傾け、ざぶりと土間へ、

「一ツ此奴へ注いでおくんな、其の方がお前さんも手數が要らない。」

「何の、私は些とも構ふことないのですえ。」

「否、御深切は難有いが、藥罐の底へ消炭で、湧くあとから醒める處へ、氷で咽喉を抉られさうな、あのビイビイを聞かされちや、身體にひつ裂が入りさうだ。……持つて來な。」

と手を揮るばかりに、一息に呻と煽つた。

「あれ、お見事。
と目を睜つて、

「まあな、だけれどな、無理酒おしいなえ。澤山、あの、心配する方が
あるですやろ。」

「お方、八百屋の勘定は。」

と亭主瞬きして頤を出す。女房は面白半分、見返りもしないで、
「取りに來たら、お拂ひやすな。」

「え、……と三百は三錢かい。」

で、算盤を空に彈く。

「女房さん。」

と呼んだ門附の聲が沈んだ。

「何です。」

「立續けに最う一つ、而して後を、直ぐ、合點かね。」

「あい。合點でございますが、貴下、豪い大酒ですな。」

「せめて酒でも參らすば。」

と陽氣な聲を出しがたが、つと仰向いて眦を上げた。

「あれ、又來たぜ、按摩の笛が、北の方の辻から聞こえる、……ヤ、
そんなに未だ夜は更けまいのに、屋根越の町一つ、恁う……田畠の畔か
とも思ふ處でも吹いて居ら。」
と身忙しさうに片膝立てゝ、當途なく吻しながら、

「音は同じだが音が違う……女房さん、どれが、どんな顔の按摩だね。」
と聞く、其時、白眼の座頭の首が、月に蒼ざめて覗きさうに、屋の棟を高く見た……：目が鋭い。

「あれ、貴方、鹿の雌雄ではあるまいし、笛の音で按摩の容子は分りませぬもの。」

「真個だ。」

と寂しく笑つて、並々注いだる茶椀の酒を屹と見ながら、
「杯の月を酌まうよ、座頭殿」と差俯いて獨言した。……が博多節の文句か、知らず、陰々として物寂しい。表の障子も裏透くばかり、霜の月の影研えて、辻に、町に、按摩の笛、其の或ものは波に響く。

(六)

「や、按摩どのか。何だ、唐突に驚かせる……要らんよ、要りませぬ。」
と彌次郎兵衛。漢屋の奥座敷、此が上壇の間とも見える、次に六疊の着いた中古の十疊。障子の背後は直ぐに様、欄干にづらりと硝子戸の外は、水煙眇として、曇らぬ空に雲かと見る長洲の端に星一つ、水に近く晃めいた、楫斐川の流の裾は、潮を籠めた霧白く、月にも苦を伏せ、蓑を乾す、繫船の帆柱が森差と垣根に近い。其處に爛臺を傍にして、火桶に手を懸け、怪訝な顔して、

「はて、お早いお着きお草臥れ様で、と茶を一ツ持つて出て、年増の女

中が、唯今引込んだばかりの處。これから膳にもせう、酒にもせうと思ふ一寸の隙間へ、のそりと出した、あの面はえ？……

此の方、あの年増めを見送つて、入交つて来るは若いのか、と前髪の正面でも見やうと思へば、霜げた冬瓜に草鞋を打着けた、と言ふ異體な面を、襖の影から斜に出して、
 （按摩でやす。）と又、悪く抜衣紋で、胸を折つて、横坐りに、蠟燭火へ
 紙火屋のかつた灯の向ふへ、ぬいと半身で出た工合が、見越入道の御
 館へ、目見得の雪女郎を連れて、出た化の慶庵と言ふ體だ。
 要らぬと言へば、黙然で、腰から前へ、板廊下の暗い方へスーを消え
 たり……：怨敵退散。」

と苦笑ひして、……床の正面に火桶を抱へた、法然天窓の連の、其の爺様を見遣つて、

「捨平さん、お互に年は取りたくないてね。些と三絃でも、とあるべき處を、お膳の前に按摩が出来ますよ……見くびつたものではないか。」「兎角、其の、年効ひもなく、旅籠屋の式臺口から、何と、事も感懃に迎へた、家の隠居らしい切髪の婆様をぢろりと見て、
 「ヤヤ、有難い、佛壇の中に美婦か見えるわ、貧の子の天井から落ち度い。などゝ、膝栗毛の書抜きを遣らつしやるで、魔が魅すのぢや。屋臺は古いわ、造りも廣大。」
 と丸木の床柱を下から見上げた。

歌行燈

三

「千年の桑かの。川の底も料られぬ、燈も暗いわ、獺も出やうづ。些と
これに懲りさつしやるが可い。」

「さん候、これに懲りぬ事なし。」

と奥歯のあたりを膨らまして微笑みながら、両手を懷に胸を擴く、襖
の上なる額を讀む。題して曰く、臨風傍可小樓。

「……とある、如何様な。」

「床に活けたは、白の小菊ぢや、一束にして掘みさし、喝乎。」と讀める。

「いや、弱寂びた事を言ふわ。」

「それへ、唯今懲りると言ふた口の下から、何ぢや、其は。やあ、見
やれ、其許の袖口から、茶色の手の、もそそとした奴が、ぶらりと出

たは、楫斐川の獺の。」

「ほい、」

と視めて、

「南無三寶」と慌しく引める。

「何ぢや其は。」

「はゝゝはゝ、拙者うまれつき疎忽にいたして、よくものを落す處から、
内の婆どのが計略で、手袋を、ソレ、ト左右絲で、繫いだものさね。袖
から胸へ潜らして、づひと引張つて両手へ嵌めるだ。何と恐しからう。捺
平さん、懲くまで身上を思ふてくれる婆どのに對しても、無駄な祝儀
は出せませんな。あゝ、南無阿彌陀佛。」

「狸めが。」

と背を圓くして横を向く。

「それ、年増が来る、秘すべし、秘すべし。」

で、手袋をたくしほみ。

處へ、女中が手を支いて、

「御支度をなさりますか。」

「いや、漸と今草鞋を解いたばかりだ。泊めて貰ふから支度はしません。」と眞面目に言ふ。

色は淺黒いが容子の可い、其の年増の女中が、これには妙な顔をして、「へい、御飯は召あがりますか。」

「先づ酒から飲みます。」

「あの、めしかがりますものは?」

「姉さん、此處は約束通り、焼蛤が名物だの。」

(七)

「其のな、焼蛤は、今も町はづれの葭賀張などでいたします。矢張り松毬で焼きませぬと美味ござりませんで、當家では蒸したのを差上げます、味淋入れて味美う蒸します。」

「はゝあ、築螺の壺焼と言つた形大道店で遣りますな。……松並木を向ふに見て、松毬のちよろゝ火、蛤の煙が此の月夜に立たうなら、

丁と龍宮の田樂で、乙姫様が洒落に姉さんかぶりを遊ばさうと云ふ處
又一段の趣だらうが、故と其がために忍んでも出られまい。……當
家の味淋蒸、其が好からう。

と小父御納得した顔して頷く。

「では、蛤でめしめありますか。」

「何?」と故とらしく耳を出す。

「あのな、蛤でめありますか。」

「いや、箸で食ひやせう、ははは。」

と獨で笑つて、懷中から膝栗毛の五箇を一冊、ポンと出して、
「難有い。」と額を推く。

女中も思はず噴飯して、

「あれ、貴下は彌次郎兵衛様でござりますな。」

「其の通り、……此の度の參宮には、都合あつて五一館と云ふのへ泊
つたが、内宮様へ参る途中、古市の旅籠屋、藤屋の前を通つた時は、前
度いかい世話に成つた氣で、薄暗いまで奥深い、あの店頭に眞鑑の獅子
火鉢がびかくとあるのを見て、略儀ながら、車の上から、帽子を脱い
でお辭儀をして來た。が、町が狭いで、向ふ側の茶店の新姐に、此の小
元を見せるのが辛かつたよ。」
と燈に向けて、てらりと光らす。

「ほゝ、ほゝ。」

「あはゝ。

で、捻平も打笑ふ、……と此の機會に誘はれたが、——前刻一人が着いた頃には、三味線太鼓で、ト、ン、ヂヤカ／＼、ぢやぢやぢやんと沸返るばかりだつた——恰度八ツ橋形に歩行板が架つて、土間を隔てた隣の座敷に、凡そ十四五人の同勢で、女交りに騒いだのが、今しがた按摩が影を見せた時分から、大河の沙に引かれたらしく、一時人氣勢が、遠くへ裾擴がりと茫と退いて、寂とした。たゞだらつ廣い中を、猿が啼きながら歩廻るやうに、キヤ／＼とする雛妓の甲走つた聲が聞こえて、重く、づゝしりと、覆かぶさる風に、何を話すともなく多人數の物音のして居たのが、此の時、洞穴から風が抜けたやうに哄と動搖めく。

「女中も笑ひ引きにすつと立つ。

「いや、此方は陰々として居る。」

「其の方が無事で可いの。」

と捻平は火桶の上に脊くいまつて、其處へ投出した膝栗毛を差覗き、しかし思ひつきぢや、私は何うも此の寝つきが悪いで、今夜は一つ枕元の行燈で讀んで見ませう。」

「止しなさい、これを読むと胸が切つて、尚ほ目が冴えて寝られなくなります。」

「何を言はつしやる、當事もない。膝栗毛を見て泣くものがあらうかい。私が事を言はつしやる、其處が餘程捻平ぢや。」

歌行燈

「いとこへ、以前の年増に小女がついて出て、膳と銚子を揃へて運んだ。

「蛤は直さに出来ます。」

「可、可。」

「何よりも酒の事。」

「捨平も、猪口を急ぐ。」

「さて、汝にも一つ遣らう、燭の可い處を一杯遣らし。」と彌次郎兵衛
酒飲みの癖で、些とぶる／＼する手に一杯傾けた猪口を、膳の外へ、其
の膝栗毛の本の傍へ、疊の上に丁と置いて、
「姉さん、一つ酌いで遣つてくれ。」

と眞顔で言ふ。

小女が、きよとんとして顔を見ると、捨平に追つかけの酌をして居た
年増が見向いて、

「喜野、お酌ぎ。其の旦那はな、彌次郎兵衛様ぢやで、喜多八さんにお
杯を上げなさるんや。」と早や心得たものである。

(八)

小父御は何故か調子を沈めて、

「あゝ、能く言つた。俺を彌次郎兵衛は難有い。居心は可、酒は可、こ
れで喜多八さへ一所だつたら、膝栗毛を正のもので、太平の民となる處

を、さて、杯をさしたばかりで、恁う酌いだ酒へ、蠟燭の灯のちらりと映る處は、何うやら餓鬼に手向けたやうだ。あの又馬鹿野郎は何うして居る……」と膝に手を支き、壘の杯を熱と見て、陰氣な顔する。

捨平も、不圖此の時横を向いて腕組した。

「旦那、其の喜多八さんを、何でお連れなさりませね。」

と愛嬌造つて女中は笑ふ。彌次郎寂しく打笑み、

「む、そりや何よ、其の本の本文にある通り、伊勢の山田ではぐれた奴さ。いけ年をして婆婆氣な、酒も飲めば巫山職もするが、世の中は道中同然。暖いにつけ、寒いにつけ、杖柱とも思ふ同伴の若いものに別れると、六十の迷兒に成つて、もし此の邊に棚からぶら下がつたやうな宿屋

はござりやせんかと、賑かな町の中を獨りとばくと尋ね飽倦んで、もう落膽しやくたと云つてな、どつかり知らぬ家の店頭へ腰を落込んで、一服無心をした處……彼處を讀むと串戯ではない、……捨平さん、真から以て涙が出ます。」

と言ふ。臉に映つて、蠟燭の火がちらりとする。

「姉や、心を切つたり。」

「はい。」

と女中が向ふを向く時、捨平も目をしばたゝいたが、

「ヤ、あの騒ぎわい。」

と鼻の下を長くして、土間越の隣室へ傾き、

「豪いぞ、金盃まで持出いたわ、人間は皆裙が天井へ宙乗りして、疊を皿小鉢が踊るさうな。おゝ～、三味線太鼓が鎗を削つて打合ふ様子ぢや。」「もし、お騒がしうござりませう、お氣の毒でござります。恰ど霜月でな、今年度の新兵さん入營なさりますで、其の送別會ぢや言ふて、彼家此家、皆、此の景氣でござります。でもな、お寝ります時分には時間に成るで静まりませう。何うぞ御辛抱なさいまして。」

「いや～、其には及ばぬ、其には及ばぬ。」
と小父御、二人の女中の顔へ、等分に手を掉つて、
「却つて賑かで大きに可い。悪く寂莫して、又唐突に按摩に出られては弱るからな。」

「へい、按摩がな」と何か知らず、女中も讀めぬ顔して聞返す。
捺平此の話を、打消すやうに咳して、

「さ、一献參らう、何うぢや、此方へも酌人を些と頼んで、……え、
それ何とか言ふの。……桑名の殿様時雨でお茶漬……とか言ふ、土
地の唄でも聞かうではないかの。陽氣にな、くわつと一つ。旅の恥は搔
棄てぢや、主はソレ叱言のやうな勤進帳でも遣らつしやい。
染めやうにも鬚はないで、私はこれ、手拭でも疊んで法然天窓へ乗せ
やうでの。」と捺平が座りながら腰を伸して高く居直る。と彌次郎眼を瞬つて、

「ヤ、平家以來の謀逆、其許の發議は珍らしい、一方荒神較なしで眞中

「乗りやせう。」

「姉え、何でも構はん、四五人木遣で曳いて來い。」

と肩を張つて大きに力む。
と素直に立てながら、
女中酌の手を差控へて、銚子を、膝に、と素直に立てながら、

「さあ、今彼方の座敷で、もう一人二人言ふて、お掛けやしたが、喜野、
藝妓さんはあつたかな。」

「誰も居やはらぬ言ふていやんした。」

「かいな、旦那さん、お氣の毒さまでござります。狭い土地に、數のな

小女が猪首で頷き、

「いや、恁うなつては、宿賃を拂はずに、此人方等夜通をするまでも、三
味線を聞かなきや納まらない。眇、いぐちでない以上は、古道具屋から
でも呼んでくれ。」

「待ちなさいまし。お、あの島家の新妓さんなら乾と居るやろ。聞いて見や。喜野、ソレお急ぎぢや、廊下走つて、電話へ掛れや。」

(九)

「持つて來い、さあ、何だ風車。」

急に勢の可い聲を出した、温鈍屋に飲む博多節の兄哥は、霜の上の
燐酒で、月わかりに直ぐ醒める、色の白いのも其まゝであつたが、二三
杯、煽切の茶碗酒で、目の縁へ颶と醉が出た。

「勝手にピ～＼吹いて居れ、でん／＼太鼓に笙の笛、此方あ小兒だ、
なあ、阿媽。……いや、女房さん、其にしても何かね、御當所は、此
の桑名と云ふ所は、按摩の多い所かね。」と笛の音に瞳がちらつく。
「貴下もな、按摩の目は蠟や云ひます、名物は蛤ぢやもの、別に何も、

多い譯はないけれど、こゝは新地なり、旅籠屋のある町やに因つて、つ
ひ、あの衆が、彼方此方から稼ぎに来るわな。」

「然うだ、成程新地だつた。」と何故か一人で納得して、氣の抜けたやう
に、片手を支く。

「お師匠さん、貴下、これから其の音聲を藝妓屋の門で聞かしてお見や
す。眞個に、人死が出來やうも知れぬせな。」と襟の處で、塗盃をくるり
と廻す。

「飛だ合せかゝみだね、人死が出來て堪るものか。第一、藝妓屋の前へは
うつかり立てねえ。」

「何故え。」

「悪くすると敵に出會す。」と投首する。

「あれ、藝が身を助けると言ふ、……お師匠さん、貴下藝妓ゆえの、お身の上かえ。——真個にな、仇だすな。」

「違つた一藝者の方で、私が敵さ。」

「あれ、のけへと、あんな憎いこと言ひなさんす。」と言ふ處へ、月は片明りの向ふ側。狭い町の、ものゝ氣勢にも暗い軒下を、からころ、からころと駒下駄の音が、土間へ深込みやうに響いて来る。……ト直ぐ其の足許を潜るやうに、按摩の笛が寂しく聞こえる。

門附は屹と見た。

「噂をすれば、藝妓はんが通りまッせ。貴下見たひなら障子を開けやす

……其のかはり、敵打たれうと思ふてな。」

「あゝ、何時でも打たれて遣ら。ちよツ、可厭に煩く笛を吹くない。」

かたりと門の戸を外から開ける。

「えゝ、吃驚すら。」

「今晚は、——餽餉六ツ急いでな。」と草履穿きの半纏着、背中へ白く月を沿びて、赤い鼻をぬいと出す。

「へい。」と筒抜けの高調子で、亭主帳場へ棒に突立ち、「お方、そりや早うせぬかい。」

女房は澄ましたもので、

「美しい足音やな、何處の？」と聞く。

歌行燈

三

「こないだ山田の新町から住替へた、こんの島家の新嫁ちや」と言ひながら、鼻赤の若い衆は、覗いた顔を外に曲げる。

ト門附は、背後の壁へ胸を反らして、一寸伸上るやうにして、戸に立つ男の肩越しに、皎とした月の廓の、細い通を見透かした。

駒下駄は些と音低く、未だ、からころと響いたのである。

「澤山出なさるかな。」

「まあ、こんの温飼のやうには行かぬで。」

「其の氣で、すぐに届けますえ。」

「はい頼んます」と、男は返る。

亭主帳場から指後向きに、日和下駄を探つて下り、がたりびしりと手

當り強く、其處へ廣蓋を出掛け。はゝあ、夫婦二人の此の店、氣の毒千萬、御亭が出前持を兼ねると見えたり。
「裏表とも氣を注げるぢや、可か、可か。一寸道寄りをして來るで、可か、お方。」

と其處等じろりと睨廻して、新地の月に提灯入らず、片手懐にしなりで、亭主が出前、ヤケにかつと戸を開けた、後を閉めないで、ひよこく出て行く。

釜の湯気が廻り分れて、門附の頬に影がさした。
女房横合から来て、

「何時まで、うつかり見送つてぢや、そんなに敵が打たれたいの。」

歌行燈

五

「女房さん、桑名ぢや……藝者の箱屋は按摩かい。」と悚氣としたやうに肩を細く、此の時漸と居直つて、女房を見た色が悪い。

(十)

「然うさ、如何に伊勢の濱萩だつて、按摩の箱屋と言ふのはなからう。私もなからうとは思ふが、今向ふ側を何とか屋の新妓とか云ふのが、からんころんと通るのを、何心なく見送ると、あの、一軒おき二軒おきの、軒行燈では淺黃になり、月影では青くなつて、薄い紫の座敷着で、襷も蹴出さず、ひつそりと白い襟を俯向いて、足の運びも進まないやうに、何となく憐れて行く。……其の後から、鼠色の影法師、女の影なら月

に地を這ふ筈だに、寒い道陸神が、のそくと四五尺離れた處を、づと前方まで附添つたんだ。腰附、肩附、歩行く振、捏つちて附着けたやうな不格好な天窓の工合、何う見ても按摩だね、盲人らしい、めんない千鳥よ。……私か何だ、だから、按摩が箱屋をすると云つちや可笑い、盲目に成つた箱屋かも知れないせ。」「どんな風の、どれな。」

と門へ出さうにする。

「いや、最う見えない。呼ばれた家へ入つたらしい。一人とも、づと前方で居なくなつた。然うか。あゝ、盲目の箱屋は居ねえのか。ア又殖へさせ……影がさす、笛の音に影がさす、按摩の笛が降るやうだ。此の

歌行燈

四

寒い月に積つたら、桑名の町は針の山に成るだらう、堪らねえ。」

とぐいと煽つて、

「えゝ、ヤケに飲め、一杯何うだ、女房さん附合ひねえ。御亭主は留守だが、明放しよ、……構ふものか、ソレ向ふ三軒の屋根越に、雪坊主のやうな山の影が覗いてら。」

と門を振向き、あ、と叫んで、

「來た、來た、來た、來やあがつた、來やあがつた、按摩々々、按摩。」
と呼吸も吐かず、續け様に忙込んだ、自分の聲に、町の中に、ぬい、と立つて、杖を脚元へ斜達ひに突張りながら、目を白く仰向いて、月に小鼻を照らされた、流しの按摩が、呼ばれたものと心得て、其のまゝ凍附

くやうに立留まつたのも、門附はよく分らぬ状で、
「影か、影か、阿媽、真個の按摩か、影法師か。」

と激しく聞く。

「真個なら、何うおしる。貴下、そんなに按摩さんが戀しいかな。」

「戀しいよ！あゝ、」
と呼吸を吐いて、見直して、眉を顰めながら、聲高に笑つた。
「はゝゝはゝ、按摩にこがれて此の體さ。おゝ、按摩さん、按摩さん、入つてくんねえ、」

門附は、撥を除けて、床几を叩いて、

「ひとつ頼まう。女房さん、濟まないが一寸借りりるせ。」

「此の疊へ来て横にお成りな。按摩さん、お客様だす、あとを閉めておくんなさい。」

「へい。」

コトくと杖の音。

「え……丁と早や影法師と同然なもので。」と掠れ聲を白く出して、黒いけんちゅう羊羹色の被布を着た、燈の影は、赤く其の皺の中へさし込んだが、日和下駄から消えても失せず、片手を泳ぎ、片手で酒の香を振分けるやうに入つた。

「聞こえたか。」

と此の門附、權のあるものいひで、五六本跳子の並んだ、膳を又傍へ

づらす。

「へゝゝ」と一寸鼻をすゝつて、ふん、とけなりさうな香を嗅ぐ。

「待ちこがれたもんだから、戸外を大が走つて、も按摩さんに見えたのさ。恁う、悪く言ふんぢやないせ……其處へねつくりと顯はれたらう、酔つては居る、幻かと思つた。」

「眞個に待兼ねて居なさつたえ。あの、笛の音ばかり氣にしなさるので、私も何うやら讀めなんだが、漸と分つたわな、何ともお待遠でござんしたの。」

「これは、おかみさま、御繁昌。」

「お客様はお一人ぢや、ゆつくり療治してあげておくれ。其れなりお寝つ

たら、お泊め申さう。」

と言ふ。

按摩どの、けろりとして、

「えゝ、其の氣で念入りに一ヶ摺りませうで。」と我が手を握つて、挫ぐ

やうにぐいと揉んだ。

「へい、旦那。」

「旦那ぢやねえ、ものもらひだ。」と又煽る。

女房が密と睨んで、

「滅相な、あの、言ひなさる。」

(十一)

「いや、横になる處ぢやない、澤山だ、此處で澤山だよ。……第一背中へ摺まられて、一呼吸でも應へられるか何うだか、實は其さへ覺束ない。悪くすると其のまゝ目を眩して打倒れやうも知れんのさ。體よく按摩さんに摺み殺されると云つた形だ。」

と眞顔で言ふ。

「飛んだ事をおつしやりませ。田舎でも、これでも、長年々期を入れました杉山流のものでござります。鳩尾に鍼をお打たせになりましても、決して間違ひのあるやうなものではござりませぬ。」と呆れたやうに、按

摩の剥く目は蒼かりけり。

「うまい、まづいを言ふのぢやない。何時の幾日にも何時にも、洒落にもな、生れてから未だ一度も按摩さんの味を知らないんだよ。」

「まあ、あんなに貴下、こがれなさつた癖に。」

「そりや、張つて／＼仕様がないから、目にちらつくほど待つたがね、いき……と成ると初産です、灸の皮切も同じ事さ。何うにも勝手が分らない、痛いんだか、痒いんだか、風説に因ると櫻つたないとね。多分私も櫻つたからうと思ふ。……處が生憎、母親が操正しく、是でも密夫の児ぢやないさうで、其の櫻たがりやう此の上なし。……あれ、あんなの、握飯を捨てるやうな手附をされる、と其の手で揉まれるかと思つ

たばかりで、最う堪らなく櫻つたい。何うも、あゝ、こりや不可え。』と脇腹を兩肱で、しつかりついて、搔箸むやうに背筋を捺る。

「はゝゝはゝ、これは何うも。』と按摩は手持不沙汰な風。

女房更めて顔を覗いて、

「何と、まあ、可愛らしい。」

「同じ事を、可哀相だ、と言つてくんねえ。……然うかと言つて、恁う

張つちや、身も皮も石に成つて固りさうな、背が詰つて胸が裂ける……揉んで貰はなくては遣切れない。遣れ、構はない。』と激しい聲して、片膝を屹と立て、

「殺す氣で蒐れ。此方は覺悟だ、さあ。ときに女房さん、袖摺り合ふの

も他生の縁ツサ。旅空掛けて恁うしたお世話を受けるのも前の世の何か
だらう。何だか、おなごりが惜いんです。搾殺されりや其切だ。最一ツ
憚りだが注いでおくれ、別れの盃に成らうも知れん。」

と雪を切つて、ついと出すと、他愛なさも餘りな、目の色の變りやう、
眦も屹と成つたれば、女房は氣を打たれ、黙然で唯目を瞑る。

「さあ按摩さん。」

「え、」

「女房さん酌いとくれよ！」

「はあ」と酌をする手が些と震へた。

此の茶碗を、一息に仰ぎ干すと、按摩が手を掛けたのと一所であつた。

がたくと身震ひしたが、面は幸に紅潮して、

「あゝ、腸へ染透る！」

「何か其の、何事か存じませぬが、按摩は大丈夫でござります。」これ
もおどつく。

「先づ、」

と突張つた手をぐだりと緩めて、

「生命に別條はなさうだ、しかし、しかし應へる。」

とがつくり俯向いたのが、ふら／＼した。

「月は寒し、炎のやうな其の指と、火水と成つて骨に響く。胸は冷い、
耳は熱い。肉は燃える、血は冷える、あつ、」と言つて、両手を落した。

「いや、手をやすめず遣つてくれ、あはれと思つて静に……よしんば
兄哥は、確乎起直つて、

「いや、手をやすめず遣つてくれ、あはれと思つて静に……よしんば
徐と揉まれた處で、私は五體が碎ける思ひだ。

其の思ひをするのが可厭さに、種々に脳んだんだが、避けねば措着く、
過れば引張る、逃げれば追ふ、形がなければ聲がする……ピイ／＼笛
は攻太鼓だ。恁う肆々と寄着かれちや、弱いものには我慢が出来ない。
淵に臨んで、崖の上に瞰下ろして踏留まる膽玉のないものは、一層の思
ひ、眞逆に飛込みます。破れかぶれよ、按摩さん。従兄弟再従兄弟か
伯叔甥か、親類なら、さあ、敵を取れ。私はね、……お夥間の按摩を

一人殺して居るんだ。」

(十一)

「今から丁ど三年前、……其の年は、此の月から一月後の師走い未に
名古屋へ用があつて來た。序と言つては悪いけれど、稼の繰廻しが何う
にか附いて、參宮が出來ると言ふのも、お伊勢様の思召し冥加のほど難
有い。ゆつくり古市に逗留して、其こそ序に、……淺間山の雲も見や
う、駿ヶ嶽の調も聞かう。二見ぢや初日を拜んで、堺橋りら、池の浦、
沖の島で空が別れる、上郡から志摩へ入つて日和山を見物する……海
が風いだら船を出して、伊良子ヶ崎の海鼠で飲まう、何でも五日六日は

逗留と云ふつもりで、……山田では尾上町の藤屋へ泊つた。驚くべからず——まさか其の時は私だつて、浴衣に袷ぢや居やしない。着換へに紋着の一枚も持つた、縞で襲衣の若旦那さ、……な憇う、雲助が傾城買の昔を語る……負惜みを言ふのぢやないよ。何も自分の働きで然うした譯ぢやないのだから。——聞きねえ、親なり、叔父なり師匠なり、恩人なりと言ふ、……私が稼業ぢや江戸で一番、日本中の家元の大黒柱と云ふ、少兀の苦い面した阿父がある。

いや、其の顔色に似合はない、氣さくに巫山戯た江戸兒でね。行年其の時六十歳を、三つと刻んだはおかしいが、數へ年のサバを算んで、私が代理に宿帳をつける時は、天地人とか何とか言つて、禪の問答をする

やうに指を三本、ひよいと出してギロリと睨む……五十七歳とかけと云ふのさ。可かね、其の氣だもの……旅籠屋の女中が出てお給仕をする前では、阿父さんが大の禁句さ。……與一兵衛ぢやあるめえし、汝へ定九郎のやうに呼ぶなえ、と唇を捻曲げて、叔父さんとも言はせねえ、兄さんと呼べ、との御意だね。

此の叔父さんのお供だらう、道中の面白さ、酒はよし、景色はよし、日和は續く。何處へ行つても女はふらない、師走の山路に、嫁花が盛りで、然も大輪が咲いて居た。

ト此の桑名、四日市、龜山と伊勢路へ掛つた汽車の中から、おなじ切符の誰彼が——其の催について名古屋へ行つた、私たちの、まあ、……

歌行燈

古

興行か……其の興行の風説をする。嘘にも何うやら、私の評判も可さうな、叔父は固より……何事も言ふには及ばん。——私が口で饒舌つては、流儀の恥に成らうから、まあ何某と言つたばかりで、世間は承知すると思つて、聞きねえ。

處がね、其の私たちの事を言ふ序に、此の伊勢へ入つてから、屹と一所に出る、人の名がある。可かい、山田の古市に惣市と云ふ按摩鍼あんしんだ。門附は其の名の言ふ時、うつとりと瞼を据えた、背を抱くやうに背後に立つた。按摩にも、床几に近く裾を投げて、向ふに、腰を掛けた女房にも、目もくれず、熟と天井を仰ぎながら、胸前にかかる湯氣を忘れたやうに手で捌いて、

「按摩だ。が其の按摩が、舊は然る大名に仕へた士族の果で、聞きねえ。私等が流儀と、同じ其の道の藝の上手。江戸の宗家も本山も、當國古市に於て、一人で兼ねたりと言ふ勢で、自から宗山と名告る天狗、高慢も高慢だが、また出来る事も出来る。……東京の本場から、誰も来て怯かされた。某も參つて挫がれた。あれで一眼でもあらうなら、三重縣に居る代物ではない。今度名古屋へ來た連中も然うぢや、贋物ではなからうから、何も宗山に稽古をして貰へとは言はぬけれど、鰻の他に、鯛がある、味を知つて歸れば可いに、——と才發けた商人風のと、でつぶりした金の入歯の、土地の物持とも思はれる奴の話したのが、風説の中でも耳に着いた。

叔父はこくこく座睡をして居たつて。私あ若氣だ、襟巻で顔を隠して睨むやうに二人を見たのよ、ね。

宿の藤屋へ着いてからも、故と、叔父を一人で湯へ遣り……女中にも一寸聞く、……挨拶に出た番頭にも、按摩の惣市、宗山と云ふ、これくした藝人が居るか、と聞くと、誰の返事も同じ事。思つたよりは高名で、現に、此の頃も藤屋に泊つた、何某侯の御隱居の御召に因つて、上下で座敷を勤た時、(さてもな、鼓ヶ嶽が近い所爲か、これほどの松風は、東京でも聞けぬ)と御賞美。

『的等にも聞かせたい』と宗山が言はれます、とちよろりと饒舌つた。

私が夥間を、――

(的等)と言ふ。

的等の一人、恁く言ふ私だ……』

(十三)

「尙ほ聞けば、古市のはづれに、其の惣市、小料理屋の店をして、妾の三人もある、大した勢だ、と言ふだらう。――何を! 按摩の分際で、宗家の宗の字、斯の道の本山が凄じい。

恁う、按摩さん、舞臺の差は堪忍してくんない。

と、密と痛さうに胸を壓へた。

「後で、能く氣がつけば、信州のお百姓は、東京の芝居なんぞ、眞個の

猪はないとて威張る……な、宮重大根が日本一なら、燕の千枚演も皇國無双で、早く言へば、此の桑名の、焼蛤も三都無類さ。其の氣で居れば可いものを、二十四の前厄なり、若氣の一圖に苛々して、第一其の宗山が氣に入らない。(的等) もぐつと瀆に障れば、妾三人で赫とした。

維新以來の世がはりに、……一時私等の稼業がすたれて、夥間が食ふに困つたと思へ。弓矢取つては一萬石、大名株の藝人^{げいじん}が、イヤ楊枝を削る、かるめら焼を露店で賣る。……麥齋屋の出前持に成るのもあり、現在私が其小父御などは、田舎の役場に小使ひをして、濁り酒のかすに酔つて、田畠の畠に寝たもんです……

其の妹だね、可かい、私の阿母が、振袖の年頃を、困る處へ懇込んで、小金を溜めた按摩めが、些とばかりの貸を枷に、妻にせう、と追ひ廻はす。——危く駒下駄を踏返して、駕籠でなくつちや見なかつた隅田川へ落すヨうとしたッさ。——其の話にでも嫌ひな按摩が。

えゝ。

待て、見えない兩眼で、汝が身の程を明く見るやう、療治を一つしてくれう。

で、翌日は謹んで、兩宮へ參拜した。

其の尊さに、其の晩ばかりは些との酒で宵寢をした、叔父の夜具の裾を叩いて、枕許へ水も置き、

『女中、其處等へ見物に、』

と言つた心は、穴を壓へて、宗山を退治る了見。
ト出た、風が荒い。荒いが此の風、五十鈴川で割られて宇治橋の向ふ
までは吹くまいが、相の山の長坂を下から咲と吹上げる……此が悪く
生温くつて、灯の前ぢや砂が黄色い。月は雲の底に淀りして居る。神路
山の樹は蒼くとも、一見の波は白からう。酷い勢ばつと吹くので、た
ちじーと成る。帽子が飛ぶから、其のまゝ、藤屋が店へ投返した……
ト背筋へ孕んで、坊さんが忍ぶやうに羽織の袖が翻々する。着替へるの
も面倒で、畫間のなりだ、神詣での紋着さ。——袖疊みに懷中へ捨込ん
で、何の洒落にか、手拭で頬被りをしたもんです。

門附に成る前兆さ、狀を見やがれ。」と片手を袖へ、二の腕深く突込んだ。片手で狙ふやうに茶碗を壓へて、

「ね、古市へ行くと、まだ宵だのに寂然して居る……軒ががたひしと
鳴つて、軒行燈がぱつゞ搔れる。三味線の音もしたけれど、吹さらは
れて大屋根へ猫の姿でけし飛ぶやうさ。何の事はない、今夜の此の寂し
い新地へ、風を持つて来て、打着けると思へば可い。

一軒地の些と窪んだ處に、構板から直ぐに竹の欄干に成つて、毛氈の
端は刎上り、疊に赤い島が出來て、洋燈は油煙に燻つたが、眞白に塗つ
た姉さんが一人居る、空氣銃吹矢の店へ、ひょろりとして引掛けたね。
取着きに、ト肱を着いて、怪しく正面に眼の光る、悟つた顔の達磨様

と、女の頬とを、七分三分に狙ひながら、

『此の邊に宗山^ツて按摩は居るかい。』と此處で、實は様子を聞く氣さ。

押懸けて行かうたつて、些とも勝手が知れないから。

『先生様かね、居らつしやります』と何と、(的等)の一人に、先生を、然も様づけに呼ぶだらう。

『實は、其の人の何を、一つ、聞きたくつて來たんだが、誰が行つても頼まれてくれるだらうか。』と尋ねると、大熨斗^{おひで}を書いた幕の影から、色の蒼い、髪の亂れた、瘦せた中年増が顔を出して、

『知己のない、旅の方には何うか知らぬ、お望なら内から案内して上げましやうか。』と言ふ。

茶代^{ちあだ}を奮發んで頼むと言つた。

『案内して上げなはれ、可い旦那^{だんな}や、氣を着けて、』と目配^{めぐわせ}をすると、……雜作^{ざつさ}はない、其の塗つたのが、いきなり、欄干^{らんかん}を跨いで出る奴さ。

(十四)

「兩袖^{りょうそ}で口を塞いで、風の中を俯向いて行く、……其の女の案内で、つい向ふ路^じ次^じに入ると、何處も吹附けるから、戸^とを鎖したが、怪しげな行燈^{あんとう}の煽^{あお}つて見える、ごたぐした兩側の長屋^{ながや}の中に、溝板^{ごうばん}の廣い、格子戸^{ぼくど}造りで、此の一軒^{いん}だけ二階屋。

軒^{のき}に、御手輕御料理としたのが、宗山先生の住居だつた。

『お客様』と云ふ女の送りで、づゝと入る。直ぐ其處の長火鉢を取巻いで、三人ばかり、變な女が、立膝やら、横座りやら、猫板に頬杖やら、料理の方は隙らしい……。上樞の正面が、取着きの狭い階子段です。

『座敷は二階かい』と突然頬被を取つて上らうとすると、風立つので燈を置かない。真暗だから一寸待つて、と、色めいてさわつき出す。ト其の拍子に風のなぐれで、奴等の上の釣洋燈がぱつと消えた。

其處へ、中仕切の障子が、次の室の燈にほりぬいて、二枚見えた。眞中へ、ぱつと映つたのが、大坊主の額の出た、唇の大きい影法師。む、宗山め、居るな、と思ふと、憎い事には……影法師の其の背中に掘まつて、坊主を揉んでるのが、華奢らしい島田齧で、此の影は濃く映つた。

火燧々々、と女どもが云ふ内に、

『えへん』と咳を太くして、大な手で、灰吹を持上げたのが見えて、離れて煙管が映る。——最う一倍、其の時圖體の擴がつたのは、袖を開いたらしい、此奴、寝ン寝子の廣袖を着て居る。

漸と臺洋燈を點けて、

『お待遠でした、さあ、』

ツて二階へ。吹矢の店から送つて來た女は、と中樞から一寸見ると、雨膝をづしりと、其處に居た奴の背後へ火鉢を離れて俯向いて座つた。

『あの娘で可いのかな、他にもござります因つて。』

と六疊の表座敷で低聲で言ふんだ。——はゝあ、商賣も大略分つた。

と思ふと、其奴が、

『お誂は。』

と大な聲。

『あつさりしたもので一寸一口、其處で、……』

『實は……御主人の按摩さんの咽喉が一つ聞きたいんだ、と話した。』

『咽喉？』

……と其奴がね、異に蔑んだ笑ひ方をしたものでした。

『先生様の……でござりますか、早速然う申しませう、』

で、地獄の手曳め、急に衣紋繕ひをして下りる。少時して上つて來た年紀の少い十六七が、……こりや何うした、よく言ふ口だが芥油に水仙です、鶴です。帶も襟も唐縮緬ぢやあるが、もみぢのやうに美しい。

結綿のふつくりしたのに、淺黃鹿の子の絞高な手柄を掛けた。やあ、三人あると云ふ、妾の一人か。おゝん神の膝元で沙汰の限りなし。宗山坊主の背中を揉んでた島田畠の影らしい。惜しや五十鈴川の星と澄んだ其の目元も、鯰の鱗で濁らう、と可哀に思ふ。此の娘が、紫の服紗に散せて、薄茶を持つて來たんですね。

いや、御本山の御見識、其の咽喉を聞きに來たと成ると、……客に先づ袴を穿かせる仕向をするな、眞剣勝負面白い。で、此方も勢い懷中から羽織を出して着直したんだね。

やがて、又持出した、盃と云ふのが、朱塗に一見ヶ浦を金蒔繪した、盃臺に構へたのは凄からう。

『先づ一ツ上つて、此方へ。』

と按摩の方から此の盃の差圖をする。其の工合が、謹んで聞け、と云つた、頗る權高なものさ。

どかりと其處へ構へ込んだ、其の容子が、膝も腹もづんぐりして、胴中ほど咽喉が太い、耳の傍から眉間に掛けて、小蛇のやうに筋が歛くる。眉が薄く、鼻がひしやげて、ソレ其の唇の厚い事、お剃に頬骨がギシと出て、歯を噛むとガナ／＼と鳴りさう。左の一眼べとりと盲る、右が白眼で、ぐるりと翻つた、然も一面、念入の黒痘瘡だ。

が、争はれないのは、不具者の相格、肩つきばかりは、みじめらしく悄乎して、猪の熊入道もがつくり投首の拔衣紋で居たんだよ。』

(十五)

「否な、何も私が意地悪を言ふわけではないよ。」

と湊屋の女中、前垂の膝を堅くして、傍に柔かな髪の房りした島田の髪を重さうに差俯向く、……襟足白く冷たさうに、水紅色の羽二重の無地の長襦袢の肩が立つて、寒げに背筋の抜けるまで、弱やかに、打消された、殘の嫁菜花の薄紫、浅黄のやうに目に淡い、藤色縮緬の二枚着で、姿の寂しい、二十ばかりの若い藝者を流盼に掛けつゝ、

「此のお座敷は貰ふて上げるから、なあ貴女、最うちやつと内へお去にや、……島家の、あの、三重さんやな、貴女、お三重さん、お歸り！」

と屹と言ふ。

「お前さんがおいでやで、ようお客様の御機嫌を取つてくれるである、
と小女ばかり、附けて置いて、私が勝手へ立違ふて居る内や、……勿
體ない、お客様の、お年寄なが氣に入らぬか。近い山田から來た言う
て、此方の私の許を見くびつたか、酌をせい、と仰有ても、浮々とした
顔はせず……三味線聞かうとおつしやれば、鼻の頭で笑ふたげな。傍
に居た喜野が見兼ねて、私の袖を引きに來た。
前刻から、あゝ、恁うと口の酸くなるまで、機嫌を取るやうにして、
私が貴女の調子を取つて、よしこの一つ上方唄でも、何うぞ三味の音を
さしておくれ。お客様がお寂しげな、座敷が浮かぬ、お見やんせ、蠟燭

の灯も白けると、頼むやうにして聞かいても、知らぬ、知らぬ、と言通
す。三味線は貴女禁物か、下手や言ふて、知らぬ云ふて、曲なりにもお
座つき一つ彈けぬ藝妓が何處にある。

よう、思ふてもお見。平の座敷か、然でないか、貴客がたのお人柄を
見りや分るに、何で貴女、勤める氣や。私が澄まぬ。さ、お立ち。えゝ
私が箱を下げるから。

と優しいのがツンと立つて、襖際に横にした三味線を邪魔に取つて、
衝と縦様に引立てる。

「あゝれ、」

はつと裳を揺らして取縋るやうに、女中の膝を密と抱き、袖を引き、

歌行燈

三

三味線を引留めた。お三重の姿は崩る如く、芍薬の花の散るに似て、堪忍して下さいまし、堪忍して、堪忍して」と、呼吸の切れる聲が濕んで、

「お客様にも、此のお内へも、な、何で私が失禮しませう。真個に、あの、真個に三味線は出来ませんもの、姉さん、」

と言が途絶えた。

「今しがたも、な、他家のお座敷、隅の方に坐つて居ました。不斷ではない。兵隊さんの送別會の大陽氣に騒ぐのに、藝のないものは置かん、衣服を脱いで踊るるなら可、可厭なら下げると……私一人歸されて、主人の家へ戻りますと、直ぐに酷いめに逢ひました、え。

三味線も彈けず、踊りも出来ぬ。座敷で衣物が脱げないなら、内で脱げ、引刹ぐ、と、な、帶も何も取られた上、臺所で突伏せられて、引窓を放と開けた、寒いお月様のさす影で、耻かしいなあ、干杓で水を立續けて乳へも胸へもかけられましたの。

此方から、あの、お座敷を掛けて下さいますと、何うでせう、炬燵で温めた襦袢を着せて、東京のお客がやさうなと、な、取つて置きの着物も出して、能う勤めて歸れや言ふて、御主人が手で、駒下駄まだ出すんです。

勤めるたつて、何うしませう……踊は立つて歩行くことも出来ませんし、三味線は、其は姉さん、手を當てれば誰にだつて、音のせぬ事は

ないけれど、彈いて聞かせ、とおつしやるもの、どうして私唄へます。
 不具でもないに情ない。調子が自分で出来ません。何を何うして、お座敷へ置いて頂けやうと思ひますと、氣が怯けて、氣が怯けて、口も満足利けませんから、何が氣に入らないで、失禮な顔をすると、お思ひ遊ばすのも無理はない、なあ……

此のお家へは、お臺所で、洗ひ物のお手傳をいたします、姉さん、え、姉さん。

と袖を摺つて、一生懸命うるんだ目元を見得もなく、仰向けに成つて女中の顔。……色が見る／＼柔いで、突いて立つた三味線の棹も撓

みさうに成つた、と見ると、二人の客へ、向直つた、ふつくりとある綫の帶の結目で、尙ほ其の女中の袂を壓へて。

(十六)

お三重は、而して、更めて一個の老人に手を支いた。

「藝者でお呼ぶ遊ばした、と思ひますと、……御役に立たず、極りが悪うございまして、お銚子を持ちますにも手が震へて成りません。下婢をお傍へお置き遊ばしたとお思ひなさいまして、お休みになりますまでお使ひなすつて下さいまし。お背中を敲きませう、な、何うぞな、お肩を揉まして下さいまし、其なら一生懸命に屹と精を出します。」

と惜氣もなく前髪を疊につくまで平伏した。二指づきの折りかゝみが、こんな中でも打上る。

本を開いて、道中の繪をじろくと黙つて見て居た總平が、重くるしい口を開けて、

「子孫末代よい異見ぢや、旅で藝者を呼ぶなどは、のう、お互に以後謹まう。」と火箸に手を置く。

所在なさうな半眼で、正面に臨風傍可小櫻を仰ぎながら、程を忘れた卷良。此時、口元へ火を吸つて、慌てゝ灰へ放つて、彌次郎兵衛は一つ咽せた。

「えゝ、いや、女中、……追つて祝儀はする。此處でと思ふが、其の

娘が氣が詰らうから、何處か小座敷へ休まして、皆で温飽でも食べてく
れ。私が驕る。で、何か面白い話して遊ばして、躊躇て可い時分に返すが
可い。」と冷くなつた猪口を取つて、寂しさうに衝と飲んだ。

女中は、これよりさき、支いて突立つた其の三味線を、次の室の暗い
方へ密と押遣つて、がつくりと筋がなへた風に、折重なるまで摺寄りな
がら、默然りで、燈の影に水の如く打搖ぐ、お三重の背中を探つて居た。
「島屋の亭が、そんな酷い事をしをるかえ。可わ、内の御隠居に然う言
うて、沙汰をして上げやう。心安う思ふておいで。眞個にまあ、能う貴
女、顔へ疵もつけんの。」
とかよわい腕を撫下ろす。

「あゝ、其も賣物ぢや言ふだけの斟酌に違ひないな。……お客様に禮言ひや。さ、而して何かを話しがてら、御隱居の炬燵へおいで、切下髪に頭巾被つて、丁どな、羊羹切つて茶を食べてや。

けども、」

とお三重の其の清らかな襟元から、優しい鬚毛を差覗くやうに、右瞼左瞼て、
「貴女、因果やな、眞個に、三味線は彈けぬかい。ベンともシャンとも。」

で、故と慰めるやうに吻々と笑つた。

人の情に溶けたと見える……冰る涙の玉を散らして、はつと泣いた

聲の下で、

「はい、願掛けをしましても、鹽斷ちまでしましたけれど、何うしても
分りません、調子が一つ出来ません。性來でござんせう。」

師走の、闇夜に白梅の面を蠟に照らされる。

「踊もかい。」

「は……い。」

「泣くな、弱蟲、さあ一つ飲まんか！元氣をつけて、向後何處へか呼ばれた時は、怯えるなよ。氣の持ちやうで何うにも成る。ジャカ〜と引鳴らせ、糸瓜の皮で搔廻すだ。琴も胡弓も用はない。銅鑼錢鼓を叩けさ。簫の笛をヒイと遣れ、上手下手は誰にも分らぬ。其なら藝なしとは言は

れまい。踊が出来すれば體操だ。」

と左右へ、羽織の紐の断れるばかり大手を擴げ、寛闊な胸を反らすと、
「一よ。」とて庄屋殿が鐵砲二つ、ぬいと前へ突出いて、囁ます如く呵々
と彌次郎兵衛。

「これ、其の位な事は出來よう。いや、其も度胸だな。見た處、其のや
うに氣が弱くては、如何な事も遣つけられまい、可哀相に。」と聲が掠れ
る。

「あの……私が、自分から、言ます事は出來ません、お恥しいのでござ
りますが、舞の眞似が少しばかり立てますの、其も唯一ツだけ。」

と云ふ顔を俯向けて、恥かしさうに又手を支ぐ。

「舞へるかえ、舞へるのかえ。」

と女中は嬉しさうな聲をして、

「お、踊や言うで明かんのぢや。舞へるのなら立つておくれ。此のお
座敷、遠慮は入らん。待ちなはれ、地が要らう。これ喜野、彼處の廣間
へ行つてな、内の千が然う言ふたて、誰でも彈けるのを借りて來やよ。」
とばんとして居た小女の喜野が立たうとする、と、名告つたお千が、
打傾いて、優しく口元を一寸曲げて傾いて、
「待つて、待つて、」

(十七)

「平時と違う。……一度營所へ行きなさると、日曜でなうては出られぬ、……お國の爲やで、馴れぬ苦勞をしなさんす。新兵さんの送別會や。女衆が大勢居ても、一人抜けてもお座敷が寂しくなるもの。可わ、旅の恥は搔棄てを反對なが、一泊りのお客さんの前、私が三味線を搔廻さう。お三重さん、立つのは何！有るものか、無いものか言ふも行過ぎた……有るものとて無いけれど、何うにか間に合はせたいものではある。」

「あら、姉さん。」

と三味線取りに立たうとした、お千の膝を袖で壓へて、些とはなじろんだ、お三重の愛嬌。

「糸に合ふなら踊ります、あのな、私のはな、お能の舞の眞似なんです。」と言ひも果てず、お千の膝に顔を隠して、小父御と捻半に背向に成つた初色しさ。包ましやかな姿ながら、身を揉む姿の着崩れして、袖を離れて疊に長い、縫袴の袖は媚かしい。

「何、其の舞を舞ふのかい。」と彌治郎兵衛は一言云ふ。

「さて、飲まう。手酌でよし。此處で舞などは願ひ下げぢや。せめてお題目の太鼓にさつしやい。ふあはは、」と何故か皺枯れた高笑ひ、此の時ばかり天井に哄と響いた。

「捻平さん、捻さん。」

「おゝ。」

と不性げに漸と應へる。

「何も道中の話の種ぢや、一寸見物をしやうと思ふね。」

「先づ、御免ぢや。」

「然らば、其許は目を瞑るだ。」

「えゝ、縁起の悪い事を言はさる。……明日にも江戸へ歸つて、可愛

い孫娘の顔を見るまでは、死んでもなか／＼目は瞑らぬ。」

「さて／＼捻るわ、ソレ其處が捻平さね。勝手になされ。さあ、あの娘

立つたり。此の爺様に違塵は入らぬぞ。それ、何にも藝がないと云うて肩腰さすらうと卑下をする。どんな眞似でも一つ遣れば立派な藝者の面

目が立つ。祝儀取るにも心持が可からうから、是非見たい。が、しかし心のまゝにしなよ、決して勤を強くるぢやないぞ。」

「あんなに仰者つて下さるもの。さあ、どんな事するのや知らんが、まづうても大事ない、大事ないな、それ、支度は入らねかい。」

「あい、」

と僅かに身を起すと、紫の襟を噛むやうに、——ふつくりしたのが、あはれに窓れた——頗深く、恥かしさうに、内懷を覗いたが、胸身に着けたと思はるゝ、……胸や、白き衣紋を透かして、濃い紫の細い包み服紗の縮緬が翻然と翻ると、燭臺に照つて、颶と輝く、銀の地の、あゝ、白魚の指に重さうな、一本の舞扇。

歌行燈

一〇六

晃然とあるのと押頂くやう、前髪を掛け、扇を其の、玉簪の如く額に當てたを、其のまゝ折目高にさりくと、月の出沙の波の影。静に照々と開くともに、顔を隠して、反らした指のみ、兩方親骨にちらりと白い。

又川口の沙加減、隣の廣間の人動搔めきが颶と退く。

唯見れば皎然たる銀の地に、黄金の雲を散らして、紺青の月唯一輪を描いたる、扇の影に聲澄みて、

「……其時あま人申様、もし此たまを取得たらば、此御子を世繼の御位になし給へと申しかば、子細わらじと領承し給ふ、扱て我子ゆゑに捨んいのち、露ほども惜からじと、千尋のなはをこしに

つけ、もし此玉をとり得たらば、此なはを動かすべし、其時人々からをそへ——」

と調子が締つて、

「……ひきあげ給へと約束し、一の利剣を抜持つて、」
と扇をきりと袖を直す、と手練ぞ見ゆる、自から、衣紋の位に年長けて、瞳を定めた其の顔。硝子戸越に月さして、霜の川浪照添ふ傍、膝立据えた疊にも、燭臺の花颶と流る。

「あゝ、待てい。」
と稔平が力の籠つた聲を掛けた。

(十八)

で、火鉢をづと傍へ引いて、

「女中、も些とこれへ火をおくれ、いや、立つに及ばん。其の、鐵瓶をはづせば可。」と、捨平がいひつける。

此の場合なり、何となく、お千も起居に身體が縮つた。

静に炭火を移させながら、捨平は膝をづらすと、革鞄などは次の室へ其だけ床の間に差置いた……車の上でも頸に掛けた風呂敷包を、重いものやうに両手で柔かに取つて、膝の上へ据えながら、お千の顔を除けて、火鉢の上へ片手を裏表かざしつゝ、

「あゝ、これ、お三重さんとか言ふの、其のお娘、手を上げられい。さ、手を上げて、」

と言ふ。……お三重は利剣で立たうとしたのを、慌しく捨平に留められたので、此の時まで、差開いた其の舞扇が、唇の花に霞ひまで、俯向いた顔をひたと額につけて、片手を疊に支いて居た。恁う捨平に聲懸けられて、わづかに顔を振上げながら、きりくと一先づ閉ぢる、と其の扇を疊むに連れて、今まで、潤と瞼を張つて見据えて居た眼を、次第に塞いだ彌次郎兵衛は、ものも言はず、火鉢のふちに、ぶるぐと震ふ指を、ト支えた形の巻蓑から、音もしないで、ほろくと灰がこぼれる。捨平坐蒲團を一膝出て、

「いや、更めて、熟と、見せて貰はうちやが、先づ此方へ寄らしやれ。
えゝ、今の謠の、氣組み、と其の型。教へも教へた、さて、習ひも習ふ
たの。」

懲うまで此を教うるものは、四國の果にも他にはあるまい。あらかた
人は分つたが、其となく音信も聞きたい。の、其許も黙つて聞かつしや
い。」

と彌次が方に、捺平目遣ひを一つして、

「先づ、何うして、誰から、御身は習ふたの。」

「はい、」

と弱々と返事した。お三重は最う、他愛なく娘に成つて、ほろりとし

て、

「あの前刻も申しましたやうに、不器用も通越した、調子はづれ、其の
上覺えが悪うござんすので、長唄の宵や待ちの三味線のナンもツンも分
りません。此の間まで居りました、山田の新町の姉さんが朝と晝と、手
隙な時は晚方も、日に三度づゝも、あの嗜んで哺めて、胸を割つて剥込
ひやうに敷へて下すつたんでござりますけれど、自分でも悲しい。…
曉の、とだけ十日かゝつて、漸と眞似だけ彈けますと、夢に成つて最
う手が違ひ、心では思ひながら、三の手が一へ近つて、とほけたやうな
音がします。」

揆で咽喉を引裂かれ、煙管で胸を打たれたのも、糸を切つた數より多

其も何も、邪慳じりんでするのではないのです。……私が、な、まだ其の前に、鳥羽とばの廓くろわに居ました時とき、……

「あゝ、お前さんは、鳥羽とばのものかい、志摩しまだな。」

と彌次郎兵衛よじろうべゑがフト聞入きいりれた。

「否、私はな、矢張やつぱ、お伊勢なんですけれど、父おとうさんが亡なくなりましてから、繼母つぐめに賣うられて行ゆきましたの。はじめに聞いた奉公ほうこうとは嘘うそのやうに違ちがひます。——お客様おぎやくの言いふこと聞きかぬ言いつて、陸はで悪くくば海うみで稼かげつて、崖といだの下さの船着ふなづきから、夜よるになると、男衆をしうに捉つかまへられて、小船こぶねに積づまれて海うみへ出でて、月つきがあつても、島しまの蔭かげの暗くろい處ところを、危あぶいなあ、ひや／＼する、

木きの葉はのやうに浮ういて歩行あるいて、寂さうとした海うみの上うえで、……悲かなしい唄うたを唄うたひます。而してお客様おぎやくの取とれぬ時は、船頭衆ふなとうしゆの胸むねに響ひびいて女めのが懸かしうなる禁厭きよひぢや、お茶挽おちゃないた罰ばや、と云いつて、船ふなから海うみへ、びしや／＼と追お下さろして、沙いさごの干ほた巖いはへ上げて、巖いはの裂さ目めへ俯かぶ向むけに口くちをつけさして、(こいし、こいし)と呼ばせます。若い衆わいしゆは船上ふなに待まつて、聲こゑが切きれると、築螺つきらの殻がらをびし／＼と打着うちけます。鹽風しおかぜが濡ぬれて吹ふく、夏なつの夜よるでも寒さいもの。……私の其そのは、師走ししゆうから、寒さの中なかで、八百八島やほやしまあると言いふ、どの島しまも皆みな白しろい、霜風しやうかぜが凍こりついた、巖いはの角かどは針はのやうな、あの、咽喉ののは裂さけ、舌したは硬こつて、潮しおを浴あびた裙すそから冷さへ通とおつて、正體じやうたいがなくな

る處を、貝殻で引搔かれて、漸と船で正氣が着くのを、灯もない、何の船やらあの、まあ、鬼の支いた棒見るやうな帆柱の下から、皮の硬い大手が出て、引摺んで抱込みます。

空には蒼い星ばかり、海の水は皆黒い。暗の夜の血の池に落ちたやうで、あゝ、活きて居るか……千鳥も暗く、私も泣く、……お恥かしうござんす。

と扇す扇の利刃に添へて、水のやうな袖をあて、顔を隠した其の風情。人は聲なくして、たゞ、ちり／＼と蠟燭の涙白く散る。

此の物語を聞く人々、如何に、日和山の頂より、志摩の島々、海の田、霞の池に鶴の舞ふ、あの、麗朗なる景色を見たるか。

(十九)

「泣いてばかり居ますから、氣の荒いお船頭が、こんな泣蟲を買ふほどなら、伊良子崎の海鼠を蒲團で、彌島の烏賊を遊ぶって、何の船からも投出される。

又、あの巖に追上げられて、霜風の間々に、(こいし、こいし)と泣くのでござんす。

手足は凍つて貝になつても、(こいし)と泣くのが本望な。巖の裂口を冲へ通つて、海の果まで響いて欲しい。もう船も去ね、潮も來い、……其のまゝで石に成つてしまいたいと思ふほど、お客様、私は、あの、「

「心でばかり長い事、思つて居りますお人があつて、……藝も容色もないものが、生意氣を云ふやうですが、……たとひ殺されても死んでもと、心願掛けて居りました。

一晩も、矢張蒼い灯の船に買はれて、其の船頭衆の言ふ事を肯かなかつたので、此方の船へ突返されると、艤の處に行火を跨いで、どぶろくを飲んで居た、私を送りの若い衆がな、玉代だけ損をしやはれ、此方衆の見る前で、此の女を海士にして慰まう、と月の良い晩でした。胴の間で着物を脱がして、虜の紐へなはを着けて、倒に海の深みへ沈

めます。づん／＼づんと沈んでな、最う奈落かと思ふ時、釣瓶のやうにきり／＼と、身體を車に引上げて、髪の零も切らせずに、又海へ突込みました。

此の時な、其の繫り船に、長崎邊の伯父が一人乗込んで居ると云ふてお小遣の無心に来て、泊込んで居りました、二見から鳥羽がよひの馬車に御者をします、塞中、襯衣一枚に袴服を穿いた若い人が、私のそんなになされるのが、餘り可哀相な、と然う云ふて、伊勢へ歸つて、其の話をしましたので、今、あの申しました。

此の間まで居りました、古市の新地の姉さんが、随分なお金子を出して、私を連れ出してくれました。

其でな、鳥羽の鬼へも面當に、藝をよく覺えて、立派な藝子に成れやつて、姉さんが、然うやつて、目に涙を一杯ためて、びし／＼撮で打ちながら、三味線を教へてくれるんですが、何うした因果か、些とも覺えられません。

人さしと中指と、一寸の間を、一日に二度づゝ、一週間も鳴らしますから、近所隣も迷惑して、御飯もまづいと言ふのですえ。

又月の良い晩でした。あゝ、今の御主人が、深切なだけ尚ほ辛い。何の、身體の切ない苦しいだけは、生命が絶えれば其で済む。一層また鳥羽へ行つて、あの巖に攔まつて（こいし、こいし）と泣かうか知らぬ、膚の紐になはつけて海へ入れられるが氣安いやうな、と島も海も目に見

えて、ふらくと月の中を、千鳥が、冥土の使ひに來て、連れて行かれさうに思ひました。…………格子前へ流しが來ました。

新町の月影に、露の垂りさうな、あの、ちら／＼光る撮音で、
博多帶しめ、筑前絞り……

と、何とも言へぬ可い聲で。

『へい、不調法、お喧しう』って、其のまゝ行きさうにしたのです。

『あゝ、身震がするほど上手い、あやかるやうに拜んで來な、それ、お賽錢をあげる氣で。』

と瀧縞お召の半纏着て、灰に袖のつくほどに、しんみり聞いてやつた姉さんが、長火鉢の曳出からお寶を出して、キイと、あの縞子が鳴る、

『帶へ狹んだ鼻紙に捻つて、私に持たせなすつたのを、盆に乗せて、戸を開けると、もう一二間行きなさいます。一人の間にある月をな、影で繋いで、ちやつと行つて、

『是嘯。』と呼んで、出した盃を、振向いてお取りでした。私や思はず其の手に縋つて、涙がひとりでに出ましたえ。男で居ながら、こんなにも上手な方があるものを、切めて其の指一本でも、私の身體についたらば、とつひおろくと泣いたのです。

頬被をして居なすつた。あの其の私の手を取つたまゝ、黙つて、少し傍の方へ退いた處で、

『何を泣く、』ッて侵しい聲で、其の門附が聞いてくれます。もう恥も何

も忘れてな、其の、あの、何うしても三味線の覚えられぬ事を話しました。

(二十)

「よく聞いて、暫時熟と顔を見て居なしました。

『藝事の出来るやうに、神へ願懸をすると云つて、夜の明けぬ内、外へ出る。鼓ヶ嶽の裾にある、雜樹林の中へ來い。三日とも思ふけれど、主人には、七日と頼んで、すぐ、今夜の明方から。……分つたか。若い女の途中が危い、此の入口まで来て待つて遣る、化されると思ふな、夢ではない。……』

とお言ひのなり、三味線を胸に附着けて、フイと暗がりへ附着いて、黒堀を去きなさいます。

其の事は言はぬけれど、明方の三時から、夜の白むまで垢離取つて、願懸けすると頼んだら、姉さんは、喜んで、承知してくれました。殺されたら死ぬ氣でな、——大恩のある御主人の、此の格子戸も見納めか、と思ふやうで、軒下へ出で振近つて、門を覗めて、立つて居るとな。

『おいで』

と云つて、突然、背後から手を取りなすつた、門附の其のお方。私はな、よう覺悟はして居たが、天狗様に擡はれるかと思ひましたえ。

あとは夢やら現やら、明方内へ歸つてからも、其の後は一日も二日も唯、花として居りましたの。……鼓ヶ嶽の松風と、五十鈴川の流の音と聞こえます、雜木の森の暗い中で、其の方に教はりました。……舞もあるの、さす手も、ひく手も、唯背後から、背を抱いて下さいますと、私の身體が、舞ひました。其だけより存じません。

最も、私が、あの、鳥羽の海へ投入れられた、其の身の上も話しませた。其の方は不思議な事で、私とは敵のやうな中だ事も、種々入組んでは居りますけれど、鼓ヶ嶽の裾の話は、誰にも言ふな、と口留めをされました。何にも話がなりません。

五日目に、最う可いから、此を舞つて座敷をせい、藝なし、とは言ふ

まい、ツて、お紀念なり、しるしなりに、此の舞扇を下さいました。
と袖で胸へ緊乎と抱いて、ふるくと肩を震はした、後毛がはぢりと
成る。

捻平溜息をして頷き、

「いや、能く分つた、教へ方も、習ひ方も、話されずと能く分つた。時
に、山田に居て、何うちやな、其の舞だけでは勤まらなんだか。」

「はい、はじめて謡ひました時は、皆が、わつと笑ふやら、中には恐い

怖いと云ふ人もござんす。何故言ふと、五日ばかり、あの私がな、天狗

様に誘ひ出された、と風説したのでござんすから、」

「は、如何にも師匠が魔でなくては、其の立方は習はれぬわ。む、で、

何かの、伊勢にも謡うたうものゝ、五人七人はあらうと思ふが、其の連
中には見せなんだか。」

「えゝ、物好に試すつて、呼んだ方もありましたが、地をお謡ひなさる
方が、何ぢやゝら、些とも、ものに成らぬと言つて、すぐにお留めなさ
いましたの。」

「はゝあ、いや、其の足拍子を入れられては、やわな諾は断れて飛ぶぢ
やよ。はゝはゝ、唸る連中紛灰ぢやて。かたゞ、此の桑名へ、住替へと
やらしたのかの。」

「狐狸や、いや、あの、吠えて飛ぶ處は、梟の憑物がしよつた、と皆
氣違ひにしなさいます。姉さんも、手放すのは可哀相や言つて下さい

したけれど、……周圍の人ひとが承知しませす、……此の桑名の島屋とは、行かひはせぬ遠い中でも、姉さんの縁續えんつさでござんすから、預けるつもりで寄越よこされましたの。」

「おゝ、其處で、又辛まろい思おもひをさせられるか。先づまことに、其は後でゆつく
り聞きかう。……其のお娘むすめ、私も同一おなじぢや、天魔てんまでなくて、若い女わらわが、
術わざをするはと、仰天あおへんしたので、手てを留とどめて済すこしなんだ、さあ、立直たちなおして、
舞まいふて下ください。太儀たいぎぢやらうが一ひとさし頼たのむ。私も久ぶりで可懷こまことにしい、御ご
身みの姿すがたで、若師匠わかじとうの御意ごおもひを得えやう。」

と言ことばの中に、膝ひざで解とく、其の風呂敷ふろしきの中なかを見みよ。土佐とさの名手めいしゅが畫ゑいた
やうな、赤い調いろは立田川たてたがは、月の裏皮うらかは、表皮ひらかは、玉の砧たまの砧きはなを、打うつや、うつうつ

に、天人てんにんも聞きけかしとて、雲井くもい、と銘めいある秘藏ひざうの塗廻ぬりまわ。老おの手捌てはねき美うつくしく、錦にしきに梭わを、投なげぐやう、さらさらくと緒なを占しめるて、火鉢ひばつの火ほに高く飛とす、と……呼吸いきをのんで驚おどろいたやうに見て居たお千せんは、思おもはずはつと兩手ふたてを支さいた。

藝わざの威嚴ゐげんは爭あらそはず、此の捨平すてひらを誰だれとかする。七十八才さいの翁おきな邊見秀へいみひで之の進しん。近頃孫ちかごろまごに代よを譲ゆつて、雪叟ゆきしゆとて隱居ひんきょした、小鼓こづ取とりつて、本朝無双ほんとうむしゆうの名人めいじんである。

いざや、小父御おやぢごは能役者のうげいしゃ、當流第一とうりゅうだいいちの老手らうしゅ、恩地源三郎おんぢげんざぶろう、即是すなはち。此の二人は、侯爵津こうしょくつの守かみが參宮さんぐうの假かりの館やかたに催よされた、一調いつぢの番組ばんぐみを勤つとめ澄すまして、あとを膝栗毛ひざくりまげで歸かへる途中とちゆうであつた。

(二十一)

却説、温餽屋では門附の兄哥が語り次ぐ。

「いや、其から、種々勿體つける所作があつて、やがて大坊主が謠出した。」

聞くと、何うして、思つたより出来で居る、按摩鍼の藝ではない。……戸外をどツどと吹く風の中へ、此の聲を打撒けたら、あのヒイ／＼笛えぐらひに纏まらうと云ふもんです、成程、随分夥間には、此奴に(的等)扱ひにされやうと言ふのが少くない。

が、私に取つちや小敵だつた。けれども藝は大事です、侮るまい、と

氣を締めて、其處で、膝を。

と坐直ると、肩の按摩が上へ浮いて、門附の衣紋が締まる。

「……此の膝を丁と叩いて、黙つて一ツ三ツ拍子を取ると、此の拍子が尋常んぢやない。……親なり師匠の叔父貴の膝に、小兒の時から、抱かれて習づた相傳だ。對手の節の隙間を切つて、伸縮みを占めつ、緩めつ、聲の重味を刎上げて、咽喉の呼吸を突崩す。寸法を知らず、間拍手の分らない、満更の素人は、盲目聲で氣にはしないが、些と商買人の端くれで、聊が心得のある對手だと、トンと一つ打たれたまゝで、最う聲が引掛つて、節が不狀に蹴躡く。三味線の間も同一だ。何うです、意氣なお方に釣合はぬ……と、と一ツ刎ねないと、野暮な矢の字が、と

うふにかすがひ、糠に釘でぐしやうと成らわね。

さすがに心得のある奴だけ、商賣人にびたりと一ツ、拍子で聲を押伏せられると、張つた調子が真ぐにたるんだ。思へば餘計な若氣の過失、此方は畜生の淺間しさだが、對手は素人の悲しさだ。

あはれや宗山、見る内に、額にたらくと衝と汗を流し、死聲を振続ると、頤から胸へ膏を絞つた……あの其の大な唇が海風を干したやうに乾いて来て、舌が硬つて呼吸が發奮む。わな／＼と震へる手で、量を摑ひやうに、うたいながら猪口を拾はうとする處、ものゝ本を未だ一枚とうたはぬ前、ピシリと其處へ高拍子を打込んだのが、下腹へ響いて、タン底から節が抜けたものらしい。

はツと火のやうな呼吸を吐く、トタンに眞俯向けて突伏す時、長々と舌を吐いて、犬のやうに疊を嘗めた。

『先生、御病氣か。』

ツて私あ莞爾したんだ。

『是非聞きたい、平に何うか。宗山、此の上に聲に成つても、貴下のを一番、聞かずには死なれぬ。』

と拳を握つてせい／＼言つてる。

『按摩さん。』

と私は呼んで、

『尾上町の藤屋まで、何のくらゐ離れて居る。』

うふにかすがひ、糠に釘でぐしやりと成らあね。

さすがに心得のある奴だけ、商賣人にびたりと一ツ、拍子で聲を押伏せられると、張つた調子が真ぐにたるんだ。思へば餘計な若氣の過失、

此方は畜生の淺間しさだが、對手は素人の悲しさだ。

あはれや宗山、見る内に、額にたらくと衝と汗を流し、死聲を振絞ると、頤から胸へ膏を絞つた……あの其の大な唇が海鼠を干したやうに乾いて来て、舌が硬つて呼吸が發奮む。わな／＼と震へる手で、疊を摑ひやうに、うたいながら猪口を拾はうとする處、ものゝ本を未だ一枚とうたはぬ前、ピシリと其處へ高拍子を打込んだのが、下腹へ響いて、タン底から節が抜けたものらしい。

はッと火のやうな呼吸を吐く、トタンに眞俯向けに突伏す時、長々と舌を吐いて、犬のやうに疊を嘗めた。

『先生、御病氣か。』

「て私あ莞爾したんだ。

『是非聞きたい、平に何うか。宗山、此の上に聲に成つても、貴下のを一番、聞かずには死なれぬ。』

と拳を握つてせい／＼言つてる。

『按摩さん。』

と私は呼んで、

『尾上町の藤屋まで、何のくらゐ離れて居る。』

『何で、』

と聞く。

『間に依つては聲が響く。内證で來たんだ。……藤屋には私の聲が聞かしたくない、叔父が一人寝てござるんだ。勇士は霜の氣勢を知るとさへ目敏い老人が、此の風だから寢苦しがつて、フト起きてても居るとならない、祝儀は置いた。歸るぜ。』

ト宗山が、熟と塞いだ目をぐる／＼と動かして、

『暫く、今の拍子を打ちなされ……古市から尾上町まで聲が聞こえやうか、』と言ひなされる、御大言、年のお少さ。まだ一度も聲は聞かず、顔は固より見た事もなけれども、……當流の大師匠、恩地源三郎どの

養子と聞く……同じ喜多八氏の外にはあるまい。然やうでござらう、恩地、

と私の名を丁と言ふ。

あゝ、醉つた、

と盃をばたりと落した。

「饒舌つて悪い私の名ぢやない。叔父に濟まない、二人とも、誰にも言ふな。」

と應揚で、按摩と女房に目をあしらひ。

「私は羽織の裾を拂つて、

『違つたやうな、當つたやうだ。が、何しろ、東京の的等の一人だ。宗

歌行燈
四三
家の宗、本山の山^{さん}宗山か。若布の附焼でも土産に持つて、東海道を這ひ上れ。恩地の臺所から音信れたら、叔父には内證で、居候の碗白が獨樂を廻す片手間に、此の浦舟でも教へて遣らう。』

とづゝと立つ。……

(一一二)

「痘痕の中に白眼を刹いて、よたよたと立揚つて、憤つた聲ながら、「可懐いわ、若旦那、盲人の悲しさ顔は見えぬ。觸らせて下され、つかまらせて下され、一撫で、撫でさせて下され。」と言ふ。

いや、撫られて堪りますか。

摺抜けやうとするんだがね、六疊の狭い座敷、盲目でも自分の家だ。素早く階子壇の降口を塞いで、無手と大手を擴げたらう……影が天井へ懸つて、充满の黒坊主が、汗膏を流して撫でうとする。

いや、其の嫉妬執着の、儉な不思議の形相が、今以て忘れられない。「可厭だ、可厭だ、可厭だ。」と、此方は夢中に出やうとする、よける、留める、行違ふで、やわな、かぐら堂の二階中みしくと鳴る。風は轟々と當る。唯黒雲に捲かれたやうで、可恐しく成つた、凄さは凄し。衝と、潜引つて、ドンと飛び摺りに、どどどと駆け下りると、ね。

『袖や、止めませい』

と宗山が二階で喚いた。歛枯聲が、風でばつと耳に當ると、三四人立

騒ぐ女の中から、すつと美しく姿を抜いて、格子を開けた門口で、しきりに掻まる。吹きつけて搔む、風で、颯と紅い袴が揺むやうに、私に抱つたのが、結綿の其の娘です。

背中を揉んでた、薄茶を出した、あの影法師の姿だらう。

「可愛い人だな、おい、殺されても死んでも、人の玩弄物にされるな。」と言捨てに突放す。

「あれ。」と云ふ聲がうしろへ、ぱつと吹飛ばれる風に向つて、砂塵の中へ、や、躍込むやうにして一散に駆けて返つた。

後に知つた、が、妾ぢやない。お袖と云ふ其の可愛いのは、宗山の娘だつたね。其を、其が娘と知つて居たら、いや、その時だつて氣が着いたら、按摩が天下の謀逆人でも、私あ退治るんぢやなかつたんだ。」と不意にがっくりと胸を折つて俯向くと、按摩の手が肩をたつて、ぬいと越す。……其の袖の蔭で取るともなく、落した盃を探りながら、入つて引被つて、可心持に寝たんだが。

あゝ、寢心の可愛い思ひをしたのは、其晩切さ。
何故ツて、宗山が其の夜の中に、私に辱められたのを口惜しがつて

傲慢な奴だけに、びしりと、もろい折方、憤死して丁つたんだ。七代まで流儀に祟る、と手探りでにじり書した遺書を残してな。死んだのは駄ヶ嶽の裾だつた。あの廣場の雜樹へ下つて、夜が明けて、漸々と小止に成つた風に、ふら／＼とまだ動いて居たとさ。
此方は何にも知らなからう、風は凧ぐ、天氣は可、叔父は一段の上機嫌。
……古市を立つて二見へ行つた。朝の中、朝日館と云ふのへ入つて、いづれ泊る、……前へ鳥羽へ行つて、ゆつくりしやう、と、直ぐに車で、山の上から日の出の下、二見の浦の上を通つて、日和山を横敷に、山の上に、海を青疊にして二人で半日。やがて朝日館へ歸る、と何うだ、

旋籠の表は黒山の人だかりで、内の廊下もごつた返す。大袈裟な事を言ふんぢやない。伊勢から私たちに逢ひに來たのだ。按摩の變事と遺書とで、其の日の内に國中へ知渡つた。別に其の事について文句は申さぬ。藝事で宗山の留を刺したほどの豪い方々、是非に一日、山田で謠が聞かして欲しい、と羽織袴、フロックで押寄せたらう。

いや、叔父が怒るまいか。日本一の不所存もの、恩地源三郎が申渡す、向後一切、謠を口にすること罷成らん。立處に勘當だ。さて宗山とか云ふ盲人、己が不束なを知つて屈死した心、斯くの如きは藝の上の鬼神なれば、自分は、葬式の送迎墓に謠を手向けう、と人々に約束して、私は其の場から追出された。

あとの事も何も知らず、其の時から、津々浦々をさすらひ歩く、門附の果敢い身の上。

(二十三)

「名古屋の大須の觀音の裏町で、これも浮世に別れたらしい、三味線一挺、古道具屋の店にあつたを工面したのがはじまりで、一錢二錢、三錢ちや木賃で泊めぬ夜も多し、日數をつもると野宿も半分、京大阪と経めぐつて、西は博多まで行つたつけ。

何だか伊勢が氣に成つて、妙に急いで、遊戻りに又來た……私が言つた唯一言、（人のおもぢやに成るな）と言つたを、生命がけで

守つて居る……可愛い娘に逢つたのが一生の思い出だ。

何う成るものでもないんだから、早く影をくらましたが、四日市で煩らつて、女房さん。」

と呼びかけた。

「お前さんちやないけれど、深切な人があつた。漸と足腰が立つたと思ひねえ。上方筋は何でもない、間違つた謡を聞いても、お百姓が（風呂が沸いた）で竹法螺吹くも当然だが、東へ上つて、箱根の山のどてつぱらへ手が掛ると、もう、な、江戸の鼓が響くから、何う我慢が成るものか！うつかり謡をうたひさうで危くつて成らないからね、今切は越せません。これから大泉原、員辨、阿下岐をかけて、大垣街道、岐阜へ出た

ら飛驒越で、北國筋へも廻らうか知ら、と富田近所を三日稼いで、桑名へ來たのが昨日だつた。

其の今夜は何うだ。不思議な人を一人見て、遣切れなくなつて此家へ飛込んだ。が、流の笛が身體に刺る。平時よりは尙ほ激しい。其處へ又影を見た、美しい影も見れば、可恐い影も見た。此處で按摩が殺す氣だらう。構ふもんか、勝手にしろ、似たものを引つけて、と、然う覺悟して按摩さん、背中へ搔つて貰つたんだ。

が、筋を抜かれる、身を揉られる、私が五體は裂けるやうだ。」

と又差傭向く肩を越して、按摩の手が、其も物に震へながら、ばたくと戦きながら、背中に獅噭んだ面の附着く……門附の拾の褪せた色は、

膚薄な胸を透かして、動悸が筋に映るやう、あはれ、博多の柳の姿に、土蜘蛛一つ掲みついでやうに凄く見える。

「誰や！」

と不意に吃驚したやうな女房の聲、うしろ見られる神棚の灯も暗くななる端に、ぺろくと紙が濡れて、門の腰障子に穴があいた。其を見咎めて一つ喚く、とがたくと、跫音高く、駆け退いたのは御亭殿。いや、困つた親仁が、一人でない、薪雜棒、棒千切れで、二人ばかり若いものを連れて居た。

「御老體、」

歌行燈

雪叟が小鼓を締めたのを見て……恁う言つて、恩地源三郎が嚴然とし
て顧みて、

「破格のお附合ひ、恐多いな。」

と膝に扇を取つて會釋をする。

「相變らず未熟でござる。」

と雪叟が禮を返して、其のまゝ坐を下へおりました。

「平に、其は、」

「いや、蒲團の上では、お流儀に失禮ぢや。」

「は、其の娘の舞が、甥の奴の係ゆゑに、遠慮した、では私も、」

と言つた時、左右へ、敷物を齊しく刎ねた。

「嫁女、嫁女、」

と源三郎、二聲呼んで、

「お三重さんか、私は嫁と思ふぞ。喜多八の叔父源三郎ぢや、更めて一

さし舞へ。」

二人の名家が屹と居直る。

瞳の動かぬ氣高い顔して、恍惚と見詰めながら、よろ／＼引退る、と
黒髪うつる藤紫肩も腕も嬌娜ながら、袖に構へた扇の利剣、霜夜に聲
も凜々と、

「……引上げ給へと約束し、一つの利剣を抜持つて……」

肩に綾なす鼓の手影、雲井の胸に光さし、艶が添つて、名譽が籠めた

心の花に、調の緒の色、颯と燃え、ヤオ、と一つ聲が懸る。

「あッ、」

とばかり、屹と見据えた——能樂界の鶴なりしを、雲隠れつ、と惜まれた——恩地喜多八、温餽屋の床机から、衝と片足を土間に落して、「雪叟が鼓を打つ! 鼓を打つ!」と身を探ひだ、胸を切めて、憮しく取つて蔽ふた、手拭、にかつと血を吐いたが、かなぐり樂てると、右手を掴んで、按摩の手を緊乎と取つた。

「祟らば、祟れ、さあ、按摩。港屋の門まで來い。最う一度、若旦那が聞かして遣らう。」

と、引立てゝ、づいと出た。

「(源三郎)……かくて龍宮に到りて宮中を見れば、其の高さ三十丈の玉塔に、彼玉をこめ置、香花を備へ、守護神は八龍並居たり、其外惡魚鰐の口、遁れがたしや我命、さすが恩愛の故郷のかたど戀しき、わの浪のあなたにぞ……」

爾時、漲る心の張に、島田の元結弗つと切れ、肩に崩るゝ綠の黒髪。水に倒れて、灯に搖めき、疊の海は裳に澄んで、塵も留めぬ舞振かな。

「(源三郎)……我子は有らん、父大臣もおはすらむ……」
と聲が幽んで、源三郎の地唄ふ節が、フト途絶えやうとした時であつた。

此の港屋の門口で、爽に調子を合はした、……其の聲、白き虹の如

く、衝と来て、お三重の姿に射した。

「(喜多八)……さるにても此のまゝに別れ果なむかなしさよと、涙ぐみて立ちしが……」

「やあ、大事な處、倒れるな。」

と源三郎すつと座を立ち、よろめく三重の背を支へた、老の腕に女浪の袖。此の後見の大磐石に、みるの縁の黒髪かけて、唄と囁すや舞扇は、銀地に、其の、雲も戀人の影も立添ふ、光を放つて、灯を白めた舞ふのである。

舞ひも舞ふた、謡ひも謡ふ。はた雪更が自得の秘曲に、桑名の海も、トトと大鼓の拍子を添へ、川浪近くタタと鳴つて、太鼓の響を汀に打て

ば、多度山の霜の頂、月の御在所ヶ嶽の影、鎌ヶ嶽、冠ヶ嶽も冠着て、客座に並ぶ氣勢あり。

小夜更けぬ。町凍てぬ。何處としもなく虚空に笛の聞こえた時、恩地喜多八は唯一人、港屋の軒の蔭に、姿蒼く、影を濃く立つて謡ふと、月が棟高く廊を照らして、渠の面に、扇のやうな光を投げた。舞の扇と、

うち表に、其處でびたりと合ふのである。

「(喜多八)……又思切つて手を合せ、南無や志波寺の觀音薩佗の力をあはせてたび給へとて、大悲の利劍を額にあて、龍宮に飛び入れば、左右へはつとぞ退いたりける、」

「背を貸せ、宗山。」と言ふとゝもに、恩地喜多八は疲れた状して、前刻から其の裾に、大きく何やら蹲まつた、形のないものゝ影を、腰掛くるやう、取つて引敷くが如くにした。
路一筋白くして、掛け燈の更けた彼方此方、杖を支いた按摩も交つてちら／＼と人立ちする。

通 リ 魔